

「児童生徒の資質・能力を育成する教員等の養成、配置、研修に関する総合的研究」調査研究報告書
 学級規模と児童の学習目標志向性との関係—小学校 5 年生を対象として—
 研究の概要

1 目的

- 大規模調査データの追加分析を行い、児童の動機づけと学級規模の関連を明らかにする。
- そのために、児童の学習目標志向性に着目し学級規模の大小と児童の課題に対する取り組み方の志向性の関連をマルチレベル構造方程式によって検討する。

2 方法

- 平成 19 年度文部科学省教職員配置に関する調査研究委託事業「生活集団および学習集団の規模と教育効果に関する調査研究」において取得されたデータのうち、小学校第 5 学年を対象に実施された調査データを追加分析（各校 1 学級、275 校、7,643 人分）。
- 児童質問紙調査として実施された、図書文化「自己向上支援検査」の下位尺度のうち学習目標志向性と類似していると考えられる自己向上意欲と、学校質問紙項目のうち調査対象学級の学級規模についての回答と、学校の特徴として「教育熱心な親が多い」に対する回答を追加分析の対象。
- 図 1 に示したマルチレベル構造方程式モデルによって、学級規模による児童の自己向上意欲への影響の違いを分析した。レベル 1 は児童レベル、レベル 2 は学級レベルである。
- 自己向上意欲については、レベルごとにマルチレベル項目反応モデルで推定。
- 学級規模は分析対象校の学級規模の中央値で中心化し、学校質問紙項目の一つである教育熱心な親の多さを共変量として扱った。

3 結果と考察

- 図 1 におけるレベル 2 の Class size（学級規模）から Motivation（自己向上意欲）へのパスが負で有意（非標準化係数が -0.016 , $p = .036$ ）。この推定値をもとに、学級規模による自己向上意欲の因子得点の予測値を、共変量とした教育熱心な親の多少（多いを 1, 多くないを 0）別に示すと、図 2 のとおり。
- 以上の結果から、本研究が分析対象とした自己向上意欲が、動機づけ研究で言うところの学習目標志向性と類似していることを踏まえると、児童の学習目標志向性は在籍する学級が小規模である方が高く、大規模である方が低いことが示唆された。

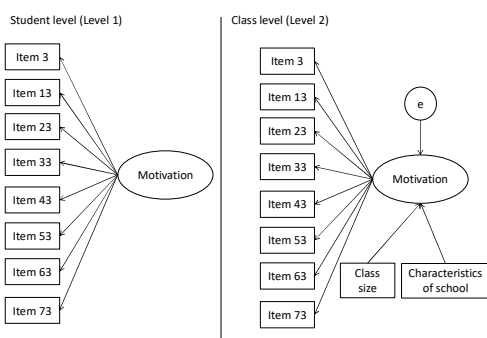


図 1 学級規模による児童の自己向上意欲への影響の違いを検討するモデル

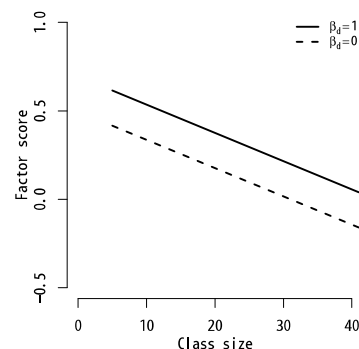


図 2 学級規模と学校の特徴による自己向上意欲の予測値